

日本山岳会 越後支部報

第 12 号

平成27年2月1日
発行 日本山岳会越後支部
発行者 橋本 正巳
新潟県上越市とよば9番地
TEL・FAX 025-524-7215
広報委員長 本間 一人



私の一枚

朝日連峰、大朝日岳 (1,871m)

朝日連峰の最高峰です。何年か前に北村、川崎の両氏と同行した時の大朝日岳から平岩山に下山している時の一枚です。

撮影 多田 政雄

新年を迎えるにあたり

支部長 橋本 正巳

新年あけましておめでとうございます。昨年の十二月初旬には県内各地はもとより徳島県つるぎ町、東みよし町を始め、全国各地で予想もなかった大雪に見舞われました。未だ記憶に新しい御嶽山の噴火を始め、長野県白馬村を震源地とする地震等の自然災害や異常気象が頻繁に発生しており、世界各地の気候変動や自然災害が大変気になるところであります。「二酸化炭素など温室効果ガスの排出が、対策を取らずにこのまま増え続けた場合、新潟県などの年平均降雪量が今世紀末には現在より一メートル以上減ると言う予測を、環境省と気象庁が十二日公表した。」(読売二〇一四／十二／十三版)。ヒートアイランド現象が叫ばれて久しく、地球規模での一層の取り組みを望む所であります。

昨年、一昨年と大変心の沈む年でありました。一昨年は室賀輝男様がお亡くなりになりました。その悲しみが冷めやらぬなか、昨年は藤井信様、小野健様、荒井辰彌様、橋立直保様、そして伊藤敏男様のご逝去であります。越後支部の中心的存在として支部活動を支えて来られた先人の皆様であり、改めて心よりご冥福をお祈り申し上げます。

日本山岳会が公益法人に移行して以来、その活動内容が大きく変化致しております。越後支部も御多分に漏れず、本部並びに各支部と呼応しながらそれらの事業を進めているところでございます。昨年五月に

は静岡支部、山梨支部、信濃支部、そして越後支部による四支部交流会が静岡支部の主催で開催されました。第一回の越後支部から始まり、丁度一巡致したところでございます。越後支部からも十人ほど参加致しました。今年も越後支部の当番であり、この四月に角田・弥彦を中心に開催すべく只今小山事業委員長を中心に鋭意努力進めて居るところでございます。七月の高頭祭には本部の森会長、高原常務理事、また昨年ご来越頂いた神崎日本山岳協会会長と「軽登山倶楽部」のご一行様約三十人をお迎えし、松明登山を始めとした多彩な行事にご参加頂き、皆様感動の内にお帰り頂いたものと存じます。公募登山も信越トレイルの二つのコースと、銀の道を実行し好評のうち恙無く終了したところです。年が変わり今年の四月には前述致しました四支部交流会を開催いたします。地元でもあり多くの会員の皆様のご参加をお願い致すところでございます。また全国支部懇談会も全国一巡し、来年は二順目の開催を越後支部でお引き受けする事になりました。その折には会員皆様方の一層のご協力をお願い申し上げます。公益事業の一つとしての公募登山も引き続き信越トレイルや塩の道を検討中でございます。会員皆様方のご理解とご協力を頂きながら、各行事を成功裏に終わらせたいと願っております。本年も会員皆様方のご健康とご活躍をご祈念申し上げます。新年に際しての御挨拶と致します。

「自然保護全国集会」報告

吉田 理一

十一月二十二日(土)日本山岳会自然保護全国集会在広島市で開催されました。越後支部から七澤恭四郎と吉田理一が参加しました。

会場の広島工業大学には全国各支部から八〇名が参加し、第一部では各支部の活動状況を報告。第二部は「里山資本主義」の演題でNHK井上恭介氏による講演がありました。越後支部からは七澤氏が各事業における清掃登山や今年から実施している公募登山についての報告をしました。

今年には広島市でのアジア山岳連盟総会に併せての開催となり、懇親会は各国からの参加者の歓迎パーティーとなりました。日本山岳協会・HATJもこの日に集会を開催し、懇親会場は三〇〇人の出席者で盛況でした。翌日は「広島山岳平和祭」が平和記念公園で行われました。

なお、県山協からは森庄一氏・遠藤俊一氏・伊藤直氏の支部会員が出席されました。



七沢 恭四郎氏
藍綬褒章受章おめでとうございます

仙人になるための登山術

筑木 力

約千六百年以上の昔、葛洪(中国の思想家)が著した「抱朴子」に説かれた様々な道教の教えの中に、「入山術」と称する事項がある。仙人になるため修行中の道士が、修得すべき登山術の要諦を述べたものである。

以下にその概要を東洋文庫版の訳注(本田濟)に拠り述べる。仙人になるため修行中の道士が修得すべき幾つかの知識・技術がある。

第一に、山中で修行して仙人になるのが登山の目的である。レジャーのためとか、山がそこにあるから登るなどとしてもない心得違いである。不老不死の術を究めて仙人になれば、山に棲み雲に乗り、風を起し、変幻自在、天空を飛翔する。

仙人になるには名山に登らねばならない。平凡な山は登っても意味がない。そこには主たる正神がいなくて、木石の精霊、千年を経た老物、血を食う鬼神がいるだけ。これらのものは人に災難をもたらす邪気であるから、道士は自分自身と弟子をこのような邪気から守るための術を心得ておかねばならない。

また仙人になるには神仙の大薬を作らねばならない。この薬がもし邪気に犯されたなら元も子もなくなる。だから道士は必ず名山だけに登らなければいけない。名山には九丹とか太清神丹といった最高の仙薬を調合するのに必要な材料が、芝草を始め他にもたくさん揃っている。名山では神仙から仙験を授かることや、秘文を聞いて読むことができる。また名山には石穴とか石窟

があり、その中に桂芝や密芝が生えていて、道士はそこを利用して仙薬を作り、その中で数年間精思する。「三皇文」とか「五岳真形」というような最も重要な道書は、こうした名山の石室幽隠の地に所蔵されていて、仙名のある者だけがこれを授かる。これは四十年に一度だけ伝えられ、血を吸って盟いを立て、礼物をおいて約束する者だけに開示される。そして、そんな条件をそなえた名山として、この本は仙経に基づいて、華山、泰山、霍山、恒山、長山、少室山、太白山、峨眉山など二十六峰を挙げている。これらの名山には正神が住み、道士が登れば必ず助けて福を授けてくれるという。

そこで名山に入るには「入山術」の心得が要る。入山するのに十分な準備が必要である。

第一に齋戒。「必ず名山に入り齋戒すること百日、五辛生魚を食わず、俗人と相まみえずして、大薬を作るべし。薬を作り成るを待ちて齋戒を解く」という。つまり飲食や動作を慎んで清掃謹慎を守れということである。五辛とはニラ、ラッキョウ、ネギ、ニンニク、ハジカミの五つの辛味のある菰菜のことで、これらの植物を避け、生魚も食わず、俗人に会ってはいけない。自分自身を清浄にし、心身の潔白を保つのがこの修行の趣旨である。

第二に六甲の秘祝。つまり呪文を心得ねばならない。六甲とは五行の方術、悪魔除けのこと、秘祝とは秘密の祈り、すなわち呪文のことである。この呪文は「臨兵闘者皆陣列前行」という九文字で唱えられた。これは「兵器を前面にして闘う者は一挙に敵を殲滅して進む」という意味に解釈されている。この九文字の呪を唱えることを日本では「九字を切る」といった。

「広辞苑」には、「護身の秘呪として用いられる九個の文字。『臨兵闘者皆陣列前行』の九字を唱え、指で空中に縦に四線、横に五線を書くときは、どんな強敵も恐れるには足らぬという護身の法。もと道家に行われ、のち陰陽道に用い、また密教の僧、修験者、忍術家などが用いた」とある。この最後の二文字「前行」が「在前」に代っているだけで、他は「抱朴子」で葛洪が記しているのと同じ呪文である。この呪文が日本の密教僧や修験者や忍者の間にも行われていたのは、「抱朴子」の思想がわが国にもかなり伝わっていたことの証拠といえよう。

第三に禹歩の法。禹歩の歩き方は、①右足を前に進め、②左足を前に進め、③右足を前に進めて、④左足を右足に合わせる。これが第一歩。次に①右足を前に進め、②左足を前に進め、③右足を左足に合わせる。これが第二歩。次に①左足を前に進め、②右足を前に進め、③左足を右足に合わせる。これが第三歩である。この調子で教えるのと、四三三……四三三……という足運びになる。そして第一歩と第二歩が最初に右足を前にするのに対して、第三歩だけは左足を前にすることから始まる。しかも第一歩、第二歩、第三歩の終りには必ず一度だけ両足を揃えて休むときがある。だから、かなりゆっくりとした歩き方である。

この禹歩こそ名山に登るときに基本的な運歩法である。ちなみに禹は夏の始祖といわれる伝説的聖王で、堯の治世のとき治水に功があった。その後、天下を九州に分かち、貢賦を定め、舜の禅譲を受けて安邑(山西)に都を移した。その国が夏である。この禹王の歩き方に禹歩は由来するとされる。その足運びは前述したもののほかに幾

つかのバリエーションがあるようだ。

この禹歩は日本でもかなり知られていたらしい。例えば陰陽師が呪文を唱えたり、舞踏したりするときの作法に用いられた。また出陣や戦争の後に軍法家が行った呪禁の際に、九字を合わせて足踏みをするのもこの禹歩が行われた。さらに貴族が外出するときにも用いられたという。しかし日本の修験者が山岳修行を行う場合に、禹歩が用いられたかどうかは定かでない。

禹歩と並んでもう一つ大切なのは、月の吉日と凶日を知り、入山するに当たっては吉日を選ぶ心得である。山に入る月は山が開けて神薬の出る三月と九月にきまつている。ただ、これは太陰暦だから、今の太陽暦に直せば四月と十月暦になる。そして吉日佳時を選んで入山すべきである。入山に最もよい日は、甲子、甲寅、乙亥、乙巳、乙卯、丙戌、丙午、丙辰で、これらの日は大吉である。逆に大の月では三日、十一日、十五日、十八日、二十四日、三十日は凶日である。小の月でも一日、五日、十三日、十六日、二十六日、二十八日は凶日である。凶日に入山すれば山神に試され、求めるものは得られず、虎狼や毒蛇の害に遭う。

入山時の必需品に符がある。符には一種の魔力が宿っていて、これを身に付けて入山すると猛獣や毒蛇の危害を避けることができる。符の種類はいろいろあるが、老君入山符と呼ばれるものが最も有名である。老君つまり老士が入山するとき帯びた符である。符を身に付けていると災難を払うばかりでなく、これをもって効験を表すときがある。齋戒のため一切の穀物を食うのを避けねばならぬ場合でも、符を食べるか、符水を飲めば、生命が維持され心身の清浄が保てる。

では符の素材は何だったのか。紙なのか特種の織維なのか、それとも今の宇宙食のような物なのか。とにかく非常食だったことは間違いないだろう。

符とともに印も必需品である。黄神越章という印を帯びて山に入れば、虎も狼も百歩以内には近づけない。そしてもう一つ、鏡も忘れてはならない。鏡は将来の吉凶を知るのに必須品なのである。九寸以上の明鏡で自分を照らし、七日七晩静思していると神仙が現れてくる。その姿は男、女、老人、若者と定まらないが、そんな神仙の指しをひとたび受けると、自分の心の中で自ら千里の外界と遠い未来を知り得るようになる。鏡を自分の背後に掛けておくと、仙人と鳥獣邪魅を区別することができる。このように鏡の効験は大きいので入山するときの必需品である。

道士の卒業試験ともいえるべき最後の仕上げは、仙人になるための仙薬の服用である。仙薬は名山の中でだけ作られねばならない。名山に入つて人を避け、神を祭り、自ら齋戒して合薬しなければ、仙薬の金液神丹は作れないし、それを作る材料も手に入らない。

不老長生の仙道を悟得するには、三つの重要な仕事、①宝精―男女の交合、②行気―深呼吸、③金液九丹の服用がある。これらの三事に精通するには、その道の権威者の明師に付いて学び、長年に亘つて修行を積み重ねなければならない。①には百余の技法があり、②にも数法があり、③には千条に及ぶ方法があるからである。これらの事柄について「抱朴子」には詳細な説明が載っているが、登山術とは直接に関係がないので省略する。しかし深呼吸とか腹式呼吸とかいう氣息を整える方法は、登山行動の前

後や最中でも適宜に試みると、効果があるのは確かである。

最後に全般的にみて、道士はどんな食料や装備を持って入山したのか。足には何を履いたのか。手には杖を持ったのか。雨具類は携行したのか。現代の登山のようにテントやツェルトはもちろん、火を燃やす燃料や道具もなかったに違いない。山中には人間が作った山小屋などあるはずがないし、道標の付いた登山道もあつたとはいえない。前述したように石室の中か、大木の幹の根元か、藪にもぐり込んでビヴァークしたのであろうし、沢を渉り、岩を攀じり、藪を漕いで行動したものと想像される。そしていつたん仙人になつてしまえば、霞を食つても生きていけたのだらうか。そんな疑問が次々と湧いてくるが、答えは出てこない。「抱朴子」が説く入山術には宗教的なベエールがかかっている、今の我々の目からみると不明な点が多くあり、中には荒唐無稽な迷信とさえ思えるものもある。

それはともかく、こうした道教の入山術は、東洋の各地に長い間影響を与えてきた。日本でも明治以降に西洋から近代登山術が入ってくるまで、相当な影響力をもっていた。この国の修験者や忍術者が九字を切つて、「臨兵闘者皆陣列在前」と呪文を唱えた事実や、山伏が護符と呼ばれる札を使つた事実などは、それを物語つて余りがあるし、また大嘗祭のとき、陰陽頭が天皇の出御の前に、禹歩を行うことが定められていたともいえる。

「抱朴子」が説いた入山術の中では、禹歩の法と護符が注目される。護符は熊野三山を始め、この国の大抵の名山、高山で発行され、修験者の重要な収入源の一つに

なっていた。禹歩の歩き方を、いま我々が重荷を背負つた急坂の登り下りで適用してみると、仙人になつた気持ちで湧いてくるかもしれない。

ところで、科学的合理性に裏付けされた現代登山の技術・心得からみて、「抱朴子」の入山術をどう評価するか。その今日的意義は何なのか。これは古今東西に亘つて人間が抱懐してきた山岳観に関わる広大なテーマであり、登山の文化史という視点からとらえてみても興味深い問題につながると思う。

「参考文献」

抱朴子(葛洪著 本田濟訳註 東洋文庫 平凡社) 古代山岳信仰の史的考察(高瀬重雄著 角川書店) 入山術(高瀬重雄著 あすの書房) 道教の本(大森崇編 学習研究社) 山岳悠々(筑木力著 恒文社)

藤島蔵書の整理作業報告

図書委員 高辻 謙輔

藤島玄元越後支部長の遺族から関川村に寄贈された約六千冊の図書と資料類は、これまで関川村公民館内の図書館に仮置されてきました。昨年、そのすべてを関川村小見の旧川北小学校校舎三階教室に移転することにになり、図書委員会としてもかわりを持ちましたので、その整理・分類作業状況について報告します。

作業体制は越後支部、関川村山の会、下越山岳会、中条山の会の会員有志によるボランティアで、具体的な作業は五十嵐図書委員長が総指揮をとり、下越山岳会の佐久間雅義氏による作業手順の作成、事前準備、

作業指示のもとで行われました。

- 六月二十四日 図書室確認・蔵書等移動
- 七月十日 分類整理
- 七月十七日 分類整理
- 八月二十八日 書架に収納
- 十月二日 収納本の整理
- 十月二十三日 書架清掃・資料分類整理
- 十一月十三日 五十嵐蔵書の搬入・整理
- 十二月一日 五十嵐蔵書の書架収納
- 十二月十一日 五十嵐蔵書の書架収納
- 十二月二十四日 全体的な点検・整理

各回の作業人員は十五名から二十名前後、延人員になると百六十名ほどになります。十一月からは五十嵐篤雄元支部長の蔵書約千冊も新たに収蔵されることになったため、当初計画よりも作業期間が伸びました。

整理分類作業は図書のほか、多くの書簡、葉書、色紙、写真、文書等も平行して行われていますが、日高信六郎や深田久弥など著名岳人の書簡、葉書をはじめ、これらの内容精査、仕訳作業には今後まだまだ多くの時間がかかりそうです。

また、藤島玄登山ノート五十八冊ほかのスキヤナー取り込みを田邊信行氏が、飯豊関連地図の作成、発行過程の精査を映彩山岳会の谷中隆明氏が、さらに今後必要となる藤島玄年譜作成のための調査を遠藤副支部長が進めています。

今後、施設公開セレモニーの開催も予定されていますが、具体的なことは未定です。



事業委員会より

第五回中部ブロック四支部交流会(越後、信濃、山梨、静岡)を越後支部主催で開催します。

- 開催日 二〇一五年四月五日(日)～六日(月)
- 会場 岩室温泉 ホテル大橋
- 会費 一五、〇〇〇円
- 親睦登山 西浦三山

(角田山、弥彦山、国上山の総称)開催にあたり支部会員皆様方の参加をお願いいたします。

今年度公募登山無事に終了しました。多数の支部会員にご協力していただきありがとうございました。来年度も開催します。ご支援とご協力をお願いします。

- 来年度公募登山予定
- 六月下旬 信越トレイル(関田峠～仏ヶ峰)
- 八月下旬 マイコミ平
- 十月下旬 塩の道(山口～白池～大綱峠～平岩)

【事務局連絡1】

支部会費値上げについてのご案内

十二月十三日に、新潟市で開催された平成二十六年度第二回越後支部役員会にて、事務局より支部年会費を来年度より一、〇〇〇円から二、〇〇〇円への値上げ申請を提議いたしました。役員会審議の結果承認され、「支部内規第五条「支部会費」一、支部年会費二、〇〇〇円」と改訂することになりました。値上げ理由についてご説明しますが、毎年収入源として、本部助成金(二、五〇〇円×支部会員数)と支部会費

(一、〇〇〇円×支部会員数)で活動してまいりましたが、本年度から本部助成金の支部会員数から永年会員三十五名(越後支部分)が除外されました。昨年度の会計報告の通り、繰越金がほとんどない状態で、支部活動前半の経費は事務局で負担して活動しております。今後も経費削減に取り組んでいきますが、越後支部として公益事業と共益事業をさらに強化し、支部活動をさらに活性化させ支障無く取り組むためにも、来年度からの支部年会費値上げにご理解とご協力をお願いします。

なお、今までに支部年会費を複数年分納入している方々が一部おられます。事務局にて値上げ分を組み込み再計算した上でご請求いたしますが、今後は事務処理軽減のため支部年会費納入は、当年度分に限らせていただきます。よろしくご承知おきください。

【事務局連絡2】

越後支部会員の勧誘と加入に協力願います。

越後支部では、新入会員の勧誘強化に取り組んでおります。本年度は、編入会員一名、新入会員七人と言う新しい仲間を得ることができました。新入会員目標は十人以上ですので、更なる会員増加に支部会員の皆様のご協力をお願いします。入会パンフレットと入会申込書は、支部事務局(桐生)にありますので是非お声かけ下さい。

【事務局連絡3】

支部会員移動連絡

(二〇一四年八月三十一日～二〇一四年十二月三十一日)

- 1) 物故会員
 - ①伊藤 敏男(No.6725)
 - 二〇一四年八月逝去
- 2) 退会会員
 - ①小野木伸夫(No.9032)
 - 二〇一四年十月
- 3) 新入会員
 - ①小嶋 正彰(申請中) 妙高市
- 4) 支部会員総数
 - 二〇一四年十二月三十一日現在
 - 支部会員総数二二四名

編集後記

今年こそは平穏であれと願うのだが、どんな一年になるのだろうか。師走早々に何年ぶりの大雪にみまわれ豪雪地帯は少し早いなと思うのだが常日頃降らない地方が大雪となり大変な冬となりそうだ。

恒例の晩餐会にはいつもの顔ぶれが見られた。元気に此の一年を終えることに感謝し当会の課題である新人の加入者が増え若返ることを願ってやまない。

原稿の投稿を随時受け付けています。私のお一枚(写真と百文字程度の記事)と紀行文(写真)もお願いします。郵送またはメール honna-kazuhito@ernobie.ne.jp でお待ちしています。